

カリブの『嵐が丘』－マリーズ・コンデの『移り住む心』を読む－

元木，淳子

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

85

(終了ページ / End Page)

105

(発行年 / Year)

2007-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004328>

カリブの『嵐が丘』

— マリーズ・コンデの『移り住む心』を読む —

元 木 淳 子

1. はじめに

グアドループ出身の女性作家マリーズ・コンデ Maryse Condé のフランス語小説『移り住む心』 *La Migration des Cœurs* (1995)⁽¹⁾ は、イギリスの女性作家エミリー・ブロンテ Emily Brontë の英語小説『嵐が丘』 *Wuthering Heights* (1847) をカリブ海地域の文脈に置き直した作品である。

一般に、男性作家たちは古今の名作を意識し、これを超える作品を創ろうとする、いわば「父殺し」の歴史を重ねてきたという。これに対して、女性作家は、作品のなかで同性の先達の仕事を称え、共感を表明する傾向があるといわれる。『移り住む心』の献辞にも「エミリー・ブロンテに捧げる。彼女の傑作に対する私の読みが気に入ってもらえればよいのだが。敬意をこめて」とある。

一方、ポストコロニアリズムの潮流の中で、帝国の文学を被植民地人の視点から問い直す試みがなされてきた。エメ・セゼール Aimé Césaire の『嵐』 *Une Tempête* (1969)⁽²⁾ などは、シェークスピアの『テンペスト』 *The Tempest* をカリブ海地域人の視点から書き換えたものである。では、マリーズ・コンデはなぜ『嵐が丘』なのか。

ところで、イギリスは今年、奴隷貿易廃止法成立二百周年を迎えるが、仏領グアドループ（現在はフランス海外県）生まれのコンデにとっては、フランスで奴隷制が廃止された 1848 年が特別な年である。それは、奇しくもエミリー・ブロンテが世を去った年でもある。それから半世紀後の二十世紀初頭、カリブ社会はどのように変化していたのかを、コンデは『移り住む心』で問おうとする。では、そのために『嵐が丘』が参照されたのはなぜか。『嵐が丘』のテーマが『移り住む心』でどのように展開されているのか。『嵐が丘』にはない『移り住む心』の

独自性はどこにあるのか。それらを探ろうとするのが本稿の目的である⁽³⁾。

2. 二つの小説

『嵐が丘』

エミリー・ブロンテは1818年、イングランドのヨークシャーに生まれた。父は牧師で、母はエミリーが幼い頃死亡。『ジェーン・エア』の作者シャーロットは姉である。姉妹で出した詩集の他は、『嵐が丘』がエミリーの唯一の作品で、出版の翌年、三十才で没した。

小説は19世紀初頭のヨークシャーの架空の地、嵐が丘が舞台だ。アーンショー Earnshaw 家の主人がリバプールで孤児を救って、ヒースクリフ Heathcliff と名付け、息子ヒンドリーと娘キャサリン Catherine（別称キャシー Cathy）とともに育てる。ヒースクリフとキャサリンは、荒涼たる野山を駆けめぐり野性児のように暮らして、互いに愛し合う。

だが、父亡き後、当主となったヒンドリーがヒースクリフを疎んじ、彼を召使いの地位に貶める。近隣のスラッシュクロスに住む富裕なリントン Linton 家に出入りするようになったキャサリンは、育ちの良い令嬢を演じて一家の心をつかみ、やがて長男エドガーの求婚を受け入れる。絶望したヒースクリフは行方をくらまし、三年後、立派な出で立ちでリントン夫妻の前に姿を現し、キャサリンに狂喜して迎えられる。

一方、ヒンドリーは、フランシス Frances という名の病弱な娘と結婚して男児ヘアトンを得ていたが、妻は出産後間もなく死亡。失意のヒンドリーをヒースクリフが酒と賭け事に誘い込み、嵐が丘の土地屋敷を巻き上げ、ヘアトンは召使いの地位に貶められる。

さて、リントン家に出入りするようになったヒースクリフにエドガーの妹イザベラが恋をする。複雑で緊張した人間関係の中でキャサリンは妊娠し、生来の気性の激しさが高じて精神の平衡を失い、女兒を早産して息を引き取る。こどもは再びキャサリンと名付けられる。イザベラはヒースクリフと結婚し妊娠するが、愛のない暮らしに耐えきれず、一人ロンドンに出奔して男児リントンを産み育て、13年後に病死する。

ヒースクリフは我が子を引き取ってキャサリン二世に近づけ、二人を無理矢理に結婚させて、リントン家の財産を手中にする。時をおかず病弱なリントンは死亡、エドガーもあいついで病死する。復讐の情熱を失ったヒースクリフは、愛するキャサリンの幻を追い求め、霊術に熱中したあげく変死する。残されたキャサリン二世は、やがてヘアトンと愛し合うようになり、二人の幸福な未来を予感させて小説は終わる。

『移り住む心』

一方、マリーズ・コンデは、1937年、グアドループの黒人エリートの家庭に八人兄弟の末子として生まれた。フランスのパリ大学で文学を学んだ後、ギニア人の俳優ママドゥ・コンデと結婚してアフリカに渡り、ギニア、コートジボワールなど大陸各地で12年を暮らした。この間、三人の娘を生み育てたが、後に離婚。1975年パリ大学に戻って、比較文学で博士号を取得。小説『ヘレマコノン』(1976)⁽⁴⁾は、ルーツを求めてアフリカに渡った若いカリブ人女性が、現地の独裁政治に苦い幻滅を味わうという、自伝的要素の濃い作品である。18世紀の西アフリカにおけるバンバラ人王国の興亡を描いた歴史小説『セグ』(1984,85)⁽⁵⁾がフランスでベストセラーになり、文名を確立した。セイラムの魔女裁判を題材とした『私はティチューバ』(1986)⁽⁶⁾でフランスの女性文学大賞、『生命の樹—あるカリブの家系の物語』(1987)⁽⁷⁾でアナイス・ニン賞を受賞している。現在の夫でアメリカ人翻訳家のリチャード・フィルコクスによって、主要な作品は英訳されている。1986年以来、グアドループと合州国を往来しながら作家活動を展開し、コロンビア大学などでカリブ文学を講じてもいる⁽⁸⁾。

『移り住む心』の舞台は、20世紀初頭のグアドループ。風の丘 Engoulvent にすむムラート（黒人と白人の混血）のガニェール Gagneur（フランス語の *gagner* は、英語の *earn* に相当）が首都ラ・ポワントで黒人の孤児を救って、ラジエ Razyé（フランス語系クレオール語で藪、雑草ほどの意）と名付け、息子ジュスタン Justin と娘カトリーヌ Catherine（別称カティ Cathy）とともに育てる。ラジエとカティは野性児のように暮らし、愛し合う。

だが、父の跡を継いだジュスタンがラジエを疎んじ、彼を召使いの地位に貶める。カティは、近隣のベケ（植民地の白人）の名門ランスイユ家 Linsseuil

(linceul 白布、経帷子を連想させる。コンデの実家の隣家の姓でもあった) に入りはじめ、長男エムリックに求婚される。絶望したラジエは三年間消息を絶つ。

ジュスタンは、病弱なベケの娘マリー＝フランス Marie-France と結婚し、男児ジュスタン＝マリー Justin-Marie を得るが、まもなく妻は死亡。風の丘に戻ったラジエは、失意のジュスタンを酒と賭け事に誘い込んで、風の丘の土地屋敷を巻き上げる。

一方、カティはラジエを狂喜して迎え、エムリックの妹イルミーヌが彼に恋をする。やがてカティが妊娠。緊張した愛憎関係の中でカティが正気を失い、女兒を出産して死亡する。こどもは再びカティと名付けられる。

十数年後、ラジエとイルミーヌは結婚して、長男ラジエ二世以下六人の子供を得ている。ラジエはエムリックのサトウキビ畑を焼き討ちにして、一家の財産をつぶし、エムリックはまもなく死亡。復讐の情熱を失ったラジエは、カティの幻を追求め、霊術に熱中した果てに変死する。カティ二世は、父の死後小学校教師として働き、ラジエ二世と出会って恋に落ち、結婚し、妊娠する。だが、貧しさの中で新婚生活は破綻し、カティ二世は女兒を出産して死亡する。アンチュリアと名付けた娘をラジエ二世は風の丘で大切に育てていく。

3. 変奏されるテーマ

(1) 複数の語り、複数の場所

『嵐が丘』は二重の語りの構造になっている。嵐が丘で起こった愛憎劇を、アーンショー家の家政婦だったネリーが、部外の青年資産家ロックウッドに語る。その話をロックウッドが小説の読者に伝える仕組みだ。ネリーは鋭い観察眼と知性を備えた女性、ロックウッドは善良だが凡庸な男性で、両者の語りによって、小説は、「信憑性の高い物語」の形をとる。

これに対して、『移り住む心』では複数の語り手が語る。『嵐が丘』のネリーの並はずれた賢さに感じたのであろう、コンデは、自らの小説にも同名の家政婦を登場させ、悲恋の発端を語らせている。だが、ネリーはその賢さのゆえに、知りすぎた使用人としてエムリックに警戒され、解雇される。その後、後任の家政婦リュシンダ、イルミーヌの乳母ジュリー、カティ二世の乳母サンドリーヌなど、人種、民族、性、年齢、職業などを異にする語り手がつぎつぎに登場し、自身の

歴史を語りつつ、主役たちの物語を紡いでいく。ひとつの出来事は複数の人物の視点から捉えられ、時に補い、あるいは正反対の解釈を与えられる。

また、『嵐が丘』では、時代を執筆当時より半世紀以上さかのぼらせ、架空の限定された場での個人的な恋愛や復讐が語られる。エミリー・ブロンテは、フランス革命に興味を持っていたといわれ、小説の細部には政治や社会への関心の高さが伺われる。だが、出版当時、若い女性の書き手とはスキャンダラスな存在で、『嵐が丘』も男性風のペンネームでの出版を余儀なくされたのだった。そのような時代における書き手の自己検閲であろうか、あるいはモデルを特定されぬための設定という説もあるが、いずれにせよ小説は社会性をそぎ落とされた心理劇となっている。

これに対して、『移り住む心』の舞台は、グアドループ、キューバ、ドミニカなど複数のカリブの島々におよび、登場人物は歴史的社会的文脈に位置づけられる。15世紀の奴隷貿易以降、アフリカ、アジア、ヨーロッパから、奴隷として、労働者として、あるいは農園主としてカリブ諸島に至った人々が、モザイクのように形成してきた歴史と現在が語られるのだ。こうして、『嵐が丘』の二重の語りは複数の語りへと展開され、個人的な恋愛が政治や社会の網に絡め取られるカリブ海地域の状況が描かれる。

(2) 身分違いの恋

『嵐が丘』が、肌の色や身分が違う男女の恋をテーマにしていることに、コンデが触発されたことには疑いの余地がない。

『嵐が丘』のヒースクリフは謎めいた存在である。顔立ちは「悪魔がよこしたみたいに色が黒い」dark as if it came from the devil⁽⁹⁾とされ、「ジプシーみたいな子」、「インドの船乗りか、アメリカ人かスペイン人の捨て子」などと軽蔑されもする。つらい身の上を嘆く少年に、ネリーは、自分の親が中国皇帝かインドの女王だったと思えばよいと助言する。このように、主人公の民族的出自は特定されていない。ただたしかなのは、彼が肌の色や顔立ちによって、イングランド帝国の周縁に位置づけられる存在だったということである。そのため、エドガーのような中心的存在である「金髪の青い目の色白の金持ち」を羨んでもいる。

だが、キャサリンが結婚に際して問題にしたのは、ヒースクリフの民族性ではなく、召使いというその身分なのだ。そして、それは変更不可能なものではなか

った。ヒースクリフの劣位の身分は、ヒンドリーが、実父のヒースクリフに対する偏愛を妬んだという、いわば偶発事によっている。それゆえに、財をなして帰還したヒースクリフは、リントン家への出入りを許される。ロックウッドも、ヒースクリフは「顔は浅黒くジプシーのようだが、服装と態度は紳士」⁽¹⁰⁾ と評価する。

小説には、キャサリンが、エドガーの求婚を承諾したとネリーに打ち明ける有名な場面がある。そこでキャサリンは、ヒンドリーがヒースクリフをこれほど貶めることがなかったなら、エドガーとの結婚も考えないのだが、と言いつをする。だが、今の状態のヒースクリフと結婚すれば、身を落とす *degrade* ことになり、二人とも乞食になってしまう、逆に、エドガーと結婚すれば、社会的上昇が果たせると言う。これをヒースクリフが立ち聞きして姿を消すのだ。

このように、『嵐が丘』では、肌の色が悲恋に決定的な作用を及ぼしてはいない。これに対して、『移り住む心』では「身分が肌の色で決められる悲しい社会」⁽¹¹⁾ が描かれる。

それは、フランツ・ファノンの言う「乳白化」*lactification*、白人志向に傾いた社会である。白人家族の当主は、黒人を信用するなど子供に教え、白人裁判官は黒人を不当に裁き、白人司祭は、黒人と結婚した白人女性を軽蔑する。混血のガニエールは、自分より色の黒い人間を軽蔑する。黒人の生活は悲惨で、黒人政治家も少なく、黒人が客としてホテルに足を踏み入れることもない時代だ。「奴隷解放から五十年も経っているのに！」という嘆きが、小説ではしばしばくり返される。

さて、孤児のラジエは外見から黒人と見なされる。肌の色が黒いと言うだけで、人から敬意を払われない状況に絶望するラジエに、ネリーは自分の先祖が王子や王女だったと思えばよいと助言する。だが、本人はエムリックのように「白い肌で金髪で青い目になりたかった」と言う。その訴えはヒースクリフよりはるかに切実だ。

一方、カティは混血の「引き裂かれ」を体現している。

『嵐が丘』の打ち明け話のシーンは、ここでも再現されている。エムリックから求婚されたカティは、ジュスタンがラジエをこれほど貶めていなかったなら、エムリックとの結婚を考えることもないのだが、今のラジエとは絶対に結婚できない。そんなことをすれば、身を落とすこと *dégradation* になり、「奴隷船から降ろされたばかりの、異教徒のカティに舞い戻り、アフリカの野蛮人として生き

直すことになってしまう」⁽¹²⁾ と言う。逆に、白人^{ベク}に嫁げば、「このネズミの巣のような生活から抜け出して、絹のドレスが着られる、召使いにもかしづかれる、自分のこどもも金持ちの白人になれる」⁽¹³⁾ と言う。「これを聞いたラジェの心のひさは粉々に砕け、二度とつなぎ合わせることはできなかった」⁽¹⁴⁾。

『嵐が丘』のネリーは、打算で結婚しようとするキャサリンを批判する。これに対して、『移り住む心』のネリーは、まずプロポーズ自体が信じがたい、白人は混血を正妻にはしないものだと言う。そして、もし本当なら結婚しない法はないという。カティは、幼い頃から、自分の中で二人のカティ——悪徳を抱えてアフリカから連れてこられたばかりのカティと、汚れなく、敬虔で秩序と節度を愛する白人の先祖そっくりのカティ——がせめぎ合い、いつも前者が勝ってきたと語り、そんな自分が白人と結婚できるのかと不安をもちます。

その不安通り、カティに幸福は訪れなかった。ラジェは、息絶えようとするカティに、アフリカの血を自己否定したから死ぬことになるのだと言う。死霊となったカティは、エムリック邸に招かれた十五才で幸福な時代は終わったと語る。物質的に華やかな暮らしは実現したが、孤独で、今までの自分を殺す不幸な人生の始まりだったと回想するのだ。

ところで、『嵐が丘』では、キャサリンとエドガーの結婚に障害はなかった。これに対して、『移り住む心』では、白人^{ベク}と混血^{ムラート}との結婚に、ベケが反対する。エムリックとイルミーヌは、ベケ社会には希有の理想家肌の兄妹と設定されている。エムリックは、モンテスキューに傾倒する進歩的な農園主で、風変わりなカティに征服欲を刺激され、一族の反対を押し切って結婚する。イルミーヌも、人種差別と女性差別にこり固まったベケ社会を痛烈に批判して、ラジェとの結婚を宣言し、勘当される。

復讐

『嵐が丘』では、恋を失った主人公の復讐が後半のテーマとなる。ヒースクリフは、キャサリンから恐ろしくひどい仕打ちを受けたと考え、復讐を誓う。ただし、「暴君が奴隷を虐げて、奴隷は暴君に反抗するかわりに、自分より下のやつを踏みつける」⁽¹⁵⁾。そのように、キャサリンに直接復讐するのではなく、「おれの血を引く者がやつらの土地屋敷の持ち主に堂々とおさまるのを見て、勝利を味わいたい。おれの子がやつらの子供たちを雇い、賃金をもらって先祖の土地を

耕す身分に落としてやる」⁽¹⁶⁾と宣言する。そして、実子リントンをを用いて、ヒンドリーとエドガーの土地を「合法的に」奪い、身分の逆転を図る。

これに対して『移り住む心』のラジエは、肌の色によって位階づけられた社会で、婚姻による合法的な復讐の手段を持たない。カティ亡き後、賭博にあけくれ、借財のある白人の屋敷を買い取っては黒人に売って稼いでいたラジエに、黒人政治家が接近する。社会主義者と称するこの男は、教育と政治によって黒人の社会的昇進を果たそうという理想を語る一方で、白人を破産させて、屈辱を味わわせたいという本音を打ち明け、グアドループの資産家エムリックを血祭りに上げようと持ちかける。復讐心をかき立てられたラジエは、個人的動機のために政治の世界に身を投じ、プランテーション焼き討ちという「非合法的手段」に訴える。そして、「おれを苦しめた男を土埃の中に倒してやるだけでなく、やつの仲間、同じ肌色のやつら、同じ階級のやつらをすべて破滅させてやる」⁽¹⁷⁾と、人種と階級による差別への怒りを、政治闘争にぶつけていく。

混交する世界

『嵐が丘』の娘キャサリンは、エドガーに愛情深く育てられ、気性の激しい母キャサリンより進化した性状を示す。ヘアトンは無学ながら、ヒースクリフのたくましさを学んで頼もしい若者に成長する。娘キャサリンがヘアトンを啓蒙して理想的な夫婦ができ、結果的に、ヒースクリフは二人を結ぶ役割を果たす。実子リントンの死によって、ヒースクリフ自身は自らの民族の血や肌の色を伝える子孫を失い、ただ、アーンショー、リントン両家を統合する触媒の役を果たして、亡霊となって嵐が丘の荒野に消えるのだ。両家はヒースクリフの「野生」を取り込みながら融合し、ヒースクリフは永遠に、両家の、そしてイングランド社会の埒外に、孤児として、在る。

一方、『移り住む心』はどうか。カティ二世は周囲が驚くほど色が黒い。エムリックは、肌の色ですべてがきまる社会で、娘の未来がすでに閉ざされていることに不安を感じる。一族の中でさえ、その肌の色のためにカティ二世は孤立している。身内の白人^{ベク}が、黒人を「ネーグル」*nègre*と侮蔑的に称するたびに、自分のことを指されたように感じ、差別なき世界に強く憧れている。

エムリックの正義感に感化された娘は、母カティより進化した性状を示し、無学なラジエ二世を啓蒙する。ところで、娘カティが、ラジエをエムリックの仇と

して憎悪しているため、ラジェ二世は、自分の素性を明かせぬままにカティ二世と結ばれる。理想家のカティ二世は、その母とは逆に、「混血^{ムラート}より黒く、黒人より白い」ラジェ二世と結婚するという、社会的降下の道を選ぶ。だが、二人の関係は、『嵐が丘』のキャサリンが怖れた、「乞食のような生活」の中で破綻する。肌の色と階級が恋を阻む社会では、『嵐が丘』のような幸福な結末は訪れず、カティ二世の恋も破局に終わる。

一方、ヒースクリフとは対照的に、ラジェには血を分けたこどもが残る。黒人ラジェは自らの肌の色を子孫に伝え、白人^{ベケ}のランスイユ家、混血^{ムラート}のガニエール家、黒人のラジェ家の血は互いに入り交じるのだ。

(3) 亡霊

『嵐が丘』のモチーフの一つである「亡霊」も、コンデの文学世界に深く関わる要素である。『嵐が丘』を18世紀末のゴシック小説の伝統に連なるとする主張もあるように、小説ではしばしば亡霊について語られる⁽¹⁸⁾。

ヒースクリフは亡霊の存在を信じている。キャサリンの死後、墓場で彼女の気配を感じて以来、「ほとんど見えそうで見えない」その姿を求めつづける。最後は、食事もとらず、医者^{ドクター}の診察も断って、何ものかを目で追いつづけ、ついに異様な微笑を浮かべてこときれる。亡霊は、特別な精神状態に陥った主体の幻覚のように提示されるのだ。一方、ヒースクリフが葬られるや、嵐が丘に亡霊が出るという噂が立ち、目撃証言も現れるなど、亡霊が、主体の意識とは別個に存在する実体であるようにも提示される。

ところで、『嵐が丘』はキリスト教が支配的な世界で、亡霊や夢占いなどは、異教、迷信の範疇に分類される。キリスト教徒でない者は「人でなし」である。リバプールから来たばかりの孤児は人間扱いされず、「それ (it)」と呼ばれる。ヒースクリフと名付けられ、洗礼を受けて初めて、「彼 (he)」と形容されることになるのだ。

ところが、主要な登場人物は、何かしら非キリスト教的な世界に足を踏み入れている。キャサリンは天国を流刑地と考え、ヒースクリフの魂はキリスト教に回収されず、人から悪魔と名指されて彷徨う。興味深いのは、父が牧師であるにもかかわらず、エミリー・ブロンテが、キリスト教から迷信として排斥される亡霊などを否定的にはとらえず、むしろ、実在するもの、何ものにも懐柔されない野

生の魂などとして肯定的に提示している点である。

これに対して、『移り住む心』の小説では、死者は、生者同様に「語る」存在である。カティー世は、死者として横たわりながら「静かに唇を動かし、(彼女の声が)聞こえる耳を持つ者に語りかけていた」⁽¹⁹⁾。

死者たちは、生者の想像とは異なる、死者の世界について語る。それによれば、死は絶対の孤独である。あの世で、先に旅立った人に巡り会えるわけではない。魂となって生者の世界に漂うこともない。かつてラジエは「自分が先に死んでもあの世には行かず、すべてのものに宿って、カティの周りを回っていよう」⁽²⁰⁾と約束したが、それは間違いだ、死は二人を隔てるものだと言死者カティは言う。

また、ラジエの亡霊が二人の息子の前に現れたように、死者は生者の前に姿を現すこともあるが、逆に、生者の望みに応じて現れるわけではない。

ところで、カリブ海地域はキリスト教一色の世界ではない。不可視の領域と現世をつなぐ霊能師のネットワークが強力な世界として描かれる。カティとラジエは、キリスト教は白人のための宗教だと考えている。^{ムラート}混血のガニエールは、神がいるならなぜ奴隷貿易があるのだと言って、キリスト教を嫌悪する。インド系移民のためのヒンドゥー教もある。黒人の宗教は精霊信仰である。

ヒースクリフ同様、ラジエもカティの姿を求め続ける。カティの結婚に絶望したラジエは、キューバに密航し、そこでサンテリアの司祭から、空間的に離れていても、心の交信ができる秘術を学ぼうとするが、その矢先、司祭が暗殺される。カティの死の直前、ラジエは霊能師を訪れて、生まれてくる子の体に母カティを閉じこめてくれと頼むが、この霊能師も不慮の死を遂げる。さらに、死者の姿を蘇らせる術を研究する男に金をつぎ込むが、男は行方不明となる。最後は、食も断って霊術に没頭し、これまで見せたことのない微笑を浮かべて息絶える。主人公が望みを遂げたかどうかは分からないままである。

(4) 自然と文化

『嵐が丘』では、自然と文化の対立もテーマのひとつである。ヒースクリフとキャサリンは、文化程度は高いがひ弱なエドガーとは対照的に、自然の中で荒々しく生きること喜びを感じる。ヘアトンとキャサリン二世の代で、自然と文化、野生と教養は美しい調和を見るだろう。

『移り住む心』では、「ラジエ的自然」と「エムリック的文化」の対立に、ア

フリカ・黒人種・情動・男性性・精霊信仰とヨーロッパ・白人種・理性・女性性・キリスト教といった、地理的、人種的、性的、宗教的対立が重ねられ、さまざまな価値観が対立し錯綜する世界が描かれる。それは、『嵐が丘』の予定調和的世界の対極にあるものだ。

それを鮮やかに表したのが、バイオリンのエピソードである。『嵐が丘』の冒頭部で、こども時分のヒンドリーとキャサリンが、バイオリンと乗馬用のムチを父親にねだる場面がある。『移り住む心』でも同じ品をジュスタンとカティは父親にせがむのだが、ここではバイオリンに特別な意味が与えられる。

少年時代からラジエは太鼓がうまく、少女たちに人気があって、ジュスタンはコンプレックスを感じていた。だが、^{ムラート}混血で白人志向の強いジュスタンには、白人文化に属するバイオリンしか選べなかった。太鼓は黒人のものだからだ。同じ理由で、カティー世は、^{ベケ}白人社会に仲間入りするために、「カドリーユを踊り、モーツァルトを聴くのだ」と宣言する。

^{ベケ}白人は、教育や文化はヨーロッパのものと考えている。それゆえエムリックは、「黒人をアフリカと退歩から引き離すために」⁽²¹⁾ 使用人に読み書きを教えるのだと言う。

ガニエールは^{ムラート}混血だが白人化することを拒み、クレオール語しか話さない。その一方で、黒人を軽蔑し、ラジエに卑猥な言葉や態度を教えて、彼をアフリカ的に「調教」して楽しむ。

カティー世はキリスト教徒として埋葬されるが、混血の女中リュシンダは、カティには、アフリカ的な葬儀、酒と語り部と音楽が似合うのと思う。

アフリカ的なものは、迷信や野蛮の領域に周辺化されてはいるが、深層で人々を支えている。ラジエと離ればなれになったカティが二度にわたって正気を失ったとき、救ったのは黒人女性治療師で、白人の薬ではなかった。だが、肌の色にかかわらず、自らが育った価値観の枠から完全に自由になることは難しい。母カティを救ったアフリカの知恵を、^{ベケ}白人の家庭で育った娘カティは拒む。妊娠して体調がすぐれないカティ二世は、精霊に相談してはと勧められるが迷信だと斥けるのだ。

アフリカとヨーロッパの対立には、性的魅力のあるなしも重ねられる。リュシンダは、「ラジエが火山なら、エムリックは日曜礼拝にいく子供のようにだ」と評し、カティー世の心と体は、夫に満足していなかったと証言する。

荒々しい自然と快適な生活の対立には、真実と虚飾、男性の好みと女性の好みも重ねられる。ヒースクリフが金持ちながら、けちで非情とされるのと同様、ラジェも、資産がありながら快適な生活を拒否し、妻子を貧窮のうちに放置する。ラジェ二世も、白人社会の価値観に飼い慣らされることを徹底的に拒否する。これに対して、イルミーヌは、ラジェの死後、贅を尽くして住居を白人好みに改装する。こどもたちを留学させ、父親とは違う言葉遣いを学ばせて、白人の上流社会に送ろうとするのだ。

4. 『嵐が丘』の謎、『移り住む心』の答え

『嵐が丘』にはいくつかの謎がある。

まずヘアトンだが、父のヒンドリーは二七才でアルコール中毒で死亡。母も結核で産後まもなく世を去る。叔母のキャサリンも十九才で絶命する。にもかかわらず、ヘアトン自身はきわめて頑丈な体の持ち主である。

一方、リントンは、頑健そのもののヒースクリフと、「火花のような気迫」⁽²²⁾をもったイザベラの一人息子である。にもかかわらず、心も体もすこぶる弱く、十七才で病死する。

エミリー・ブロンテ自身は、三才の時母を失い、六人兄弟のうち二人の姉は幼くて死亡。兄ブランウェルは麻薬とアルコールにおぼれて 1848 年 9 月に死亡。エミリーは、医師の治療も拒んで同年 12 月に、妹アンは翌年 5 月に二十八才で世を去った。一人残ったシャーロットも三十九才で他界している。夭折の家系のゆえに、その遺伝的に「自然な」設定を拒もうとしたのだろうか。いずれにせよ、二人の人物設定は不自然である。

もう一つはキャサリン二世についての謎である。キャサリンのヒースクリフへの執着は尋常でない。ヒースクリフが失踪したとき最初の神経発作を起こし、狂乱してのちは、自分はヒースクリフから引き離されて、見知らぬ人の妻にさせられ、空白の年月を過ごしたと被害者風に述懐する。いまわの際にヒースクリフにキスをして、自分のそばを離れないでくれと懇願し、夫の眼前でも彼を放そうとはしない。このような激しい愛情を示すキャサリンが残した娘の生物学上の父が誰であるのか。だが、それがヒースクリフであることをほのめかす記述は全くない。西が言うように、「姦通の香り」は徹底して忌避されているのだ⁽²³⁾。

これに対して、『移り住む心』ではこれらの謎が消えている。すなわち、ヘアトンに相当するジュスタン＝マリーは病身に、リントンに相当するラジェ二世は頑健に、そして、キャサリン二世に相当するカティ二世は、ラジェが生物学上の父であることが強く示唆されているのだ。

『嵐が丘』は、キャサリンとヒースクリフの「何者も引き裂きえない」愛を描きながら、直接的な性愛表現はほとんどない。時代の制約の中で、おそらくはエミリーが書きえなかったことを、現代のマリーズ・コンデは引き継ごうとするかのようだ。その時、表現はより自由で直截なものになるだろう。「修正」された設定から、登場人物はどのように動き出すのだろうか。

新たな展開

ジュスタン＝マリーの母マリー＝フランスは、富裕な白人^{ベケ}一家の娘だが、あまりに病弱なため、一族が、生きているうちに幸せを味わわせてやりたい、と本来ならば許さない混血^{ムラート}との結婚を認める。ジュスタン＝マリーは、父の死後、ラジェ夫妻に引き取られる。カティに生き写しのジュスタン＝マリーに、ラジェは、カティの生まれ変わりかと倒錯的な愛を感じる。

ジュスタン＝マリーも、ラジェが、ストライキを扇動する「悪魔」と新聞で報じられ、グアドループで最も怖れられ、女たちに最も人気のある人物であることを誇らしく思っている。ムラートと黒人が将来天下を取るのだ、と公言し、エムリックを打倒すべき階級敵と見なしている。

ジュスタン＝マリーは高校生で結核を患う。図らずも行き会ったエムリックは、青年に亡き妻の面影を見て驚き、転地療養させようと申し出、ジュスタン＝マリーは、助かりたい一心で承諾する。自分に心酔していたはずのジュスタン＝マリーが、かつてのカティのように、生き延びるためにエムリックに走ったことに、ラジェは衝撃を受ける。「黒人は何も白人に劣るところがないのに、いつも負けてしまう」⁽²⁴⁾ ことの無念さに、エムリックへの憎しみが再燃し、そのサトウキビ畑を焼き払う。一方、エムリックは、すべての情熱を傾けてジュスタン＝マリーの看病にあたるのだが、病人は彼をわずらわしく感じる。邸内の使用人の娘でインド系のエティエニーズと出会ったジュスタン＝マリーは、彼女に強引に迫り、もみ合う最中に血を吐いて死ぬ。

『嵐が丘』では、病弱なリントンは満足な治療も施されず、親の復讐の道具に

され、わがままな病人として、その死も同情的には語られない。これに対して、ジュスタン＝マリーは、若くして病んだ哀れむべき存在として周囲から懸命な看護を受け、エティエニーズと幸福な数日を過ごす。短い生涯を過剰なほどの愛情に包まれて閉じるのだ。

エムリックは、カティに続いてジュスタン＝マリーにも愛されなかった敗北感をかみしめ、結核に感染してまもなく息を引き取る。

一方、ラジェ二世は、ヒンドリーと同様、父が養子を偏愛することに苦しんできた。父は、ジュスタン＝マリーには学校を続けさせながら、ラジェ二世には鍛冶屋に奉公に行かせる。夫を愛しながら憎まずにいられない母は、あまりにも夫に似ているラジェ二世を素直に愛せなかった。「自分が愛されないのは、自分が黒いからなのか、ジュスタン＝マリーは白いからよいのか」と息子は母に問う。父が苦しみ続けてきた問いを息子もくり返すことになるのだ。

さて、カティ二世は、母が黒人を愛して、そのために死んだという噂を耳にする。だが、真相を知るリュシンダはすでに故人となっていた。カティ二世は、母の秘密には踏み込まないと決める。乳母のサンドリーヌは、「アフリカの血は裏切り者。バンバラの先祖が復讐するのか、誰も予想しない時に突然現れるものなのだ」⁽²⁵⁾とカティ二世の肌の黒さを説明し、噂を否定する。

エムリックの死は、カティ二世に出発の自由をもたらし、マリー＝ギャラント島へ、当時としては珍しい若い女性の小学校教師として赴任する。理想に燃え、ねばり強く教育するが、あまりに育ちがよい娘を島の人々は即座に受け入れようとはしなかった。

一方、ラジェ二世は、それとは知らずに父の愛人である娼婦と関係をもつ。この世で唯一の恐るべき存在である父の報復を怖れて、息子はマリー＝ギャラントへ逃亡し、そこでカティ二世と出会う。ラジェ二世にとって、ランスイユ家は母を苦しめた差別と偏見の代名詞である。だが、カティ二世が自分と同様肌が黒いを見て、暴行の果てのこどもなのかと思い、その母にも好奇心を抱く。

ラジェ二世とカティ二世の出会いは、価値観の衝突から始まった。カティ二世にとって、ラジェ二世が提示する黒人のものの見方は衝撃だった。エムリックの感化を受けて、カティ二世は、奴隷制廃止の立役者のフランス人、シェルシェールを尊敬し、逃亡奴隷を厭い、教え子たちにクレオール語を話すことを禁じてき

た。だが、ラジェ二世は、それこそ奴隷主義者の考え方だと批判し、カティ二世は意識改革を迫られる。

やがて、二人は愛し合い、甘い言葉も交わさぬながら、「同じ血が血管を流れる兄と妹のように、互いに近い存在であると感じ、やがて必ず訪れる完全な合一の時を急がず待てばよい」⁽²⁶⁾ と了解するようになる。

そこへ、ラジェ一世が息子を追って島に渡り、カティ二世との恋の噂を聞いて、娘に会いに来る。対面したラジェは、彼女がカティ一世に似ていないことに憤りを感じ、「母に似ていない娘は怪物だ」と思う。これまで、カティ二世がラジェに似ているという噂を知ってはいたが、カティ一世が最期の頃あまりに衰弱していたので、自分の子を宿すことはあり得ないと考えてきたという。だが、これはラジェにとって絶好の復讐の機を意味した。カティ二世が自分の娘だと主張すれば、ランスイユの家名が汚れるからだ。だが、ラジェはもはや復讐の情熱を失っていた。

父を怖れて、ラジェ二世はカティ二世とともに英領ドミニカの首都ロゾーに渡り、結婚する。だが、英語が話せず、学歴のないラジェ二世には荷揚げ人足の仕事しかない。カティ二世は市場で売るためのかごを編む。赤貧洗うがごとき生活のなかで、カティは妊娠する。二人を兄妹と思っていた隣人は、夫婦だったと認識する。イギリス人神父も夫婦の相似に気づくが、血脈が絡まり合い、人種の血が混じり合うこの社会では、知らずに異母兄妹が愛し合うこともあり得ると考える。苦境が愛の火を消し、妻は夫にとって日常的で重荷な、妹のような存在に変わる。だがそれでも、死をもっても彼女とは離れられないことを夫は知っていた。

一方、カティ二世は、自分が出産に耐えられないと感じていた。生まれてくる子が娘ならアンチュリアと命名せよと遺言し、「母のような許しのほほえみ」を残して息を引き取る。その微笑に、残された夫は、妻が自分の本名を知っていたのかといぶかる。妻は高次の人生を求めて結婚したのに、自分は何も与えられなかったと夫は涙に暮れ、色の浅黒く美しい娘とともに帰郷を決意する。旅の船上から、妻の日記を海に捨て、その心の真相を水底に葬ってしまう。

このように、『嵐が丘』の謎に答えながら、コンデは自らの作品には謎を仕掛けていく。カティ二世は実は誰の子だったのか、彼女は夫がラジェの息子だと知っていたのか、自分自身がラジェの娘である可能性を疑っていたのか、作品には疑問に答えるただ一つの視点がない。すべては謎のままなのだ。

5. カリブの愛の未来

心の移動

さて、『移り住む心』に独自のテーマの一つは「移動」migrationである。*La Migration des Cœurs* という小説のタイトルは何を意味しているのだろうか。

『嵐が丘』では、登場人物は嵐が丘という土地を愛し、そこにとどまって生涯を終える。エミリー・ブロンテも、生涯の大半を家で暮らした。だが、『移り住む心』の登場人物たちにとって、自分の生きる土地は、本来愛することのできる場ではない。migrationという言葉は、集団的な人の移動、移民のイメージを喚起するが、まさしく、人々が暮らし、働くプランテーションは、奴隷として強制的に移動させられた場所なのである。人はそこを牢獄と感じ、そこからの脱出を夢見ている。マリーズ・コンデも、世界中を移動して生きてきた。

コンデの作品では、悪辣な scélérat という言葉が何度もくり返される。現実はどうしようもなく悪辣だ。そして人は悪辣な現実には縛りつけられて、身動きできない。それゆえに、人は心の中で、想像の世界で、すべての障害を越えて自由に移動しようとする。とりわけ、奴隷解放以降、多くの男たちは家族を捨てて都市に出たが、女たちは農園に残された。だから、女たちは、心だけは自由に羽ばたかせて、恋する男が水平線の向こうへ連れ去ってくれることを夢見る。「他の国へ、他の肌へ飛び立とうとする」⁽²⁷⁾ のだ。migration des cœurs とは、心が現実の制約を超えて夢の世界に移動することでもある。

心は他者に向かっても移動する。愛する人に心は移る。だが、すべて人の心はすれ違う。『嵐が丘』の主人公たちは亡霊となって結ばれるが、『移り住む心』の恋人たちは、つかの間「体と体、心と心」⁽²⁸⁾ が結ばれる幸福な時期を過ごす、やがて離ればなれになって、ついには死者となってもそれぞれの道を行く。

ラジエは家族から愛されながら、心の渇きはいやされることがない。「人は、自分が夢見た愛が得られなければ、他人を愛することもできない」からだ。イルミーヌは夫を愛したが報われなかった。「愛は奇跡を生む」⁽²⁹⁾ のに、結局、夫を変えられなかったと悔やむ。そして、憎しみも嫉妬もなく、カティのそばに夫を葬るのだ。母の心も、人種や民族を越えて移動する。伝染病で三人の男の子を失ったインド系移民のサンジタは、なくした息子の埋め合わせをするように、ジュスタン＝マリーを懸命に介抱する。娘の心も母を慕って動く。死を覚悟したカティ

二世は、あの世で母と再会する瞬間を想像するが、そこには、十六才で母を失ったコンデの思いも込められていよう。

ところで、死んでも人は移動し続ける。死者のカティー世によれば、死は、戻る途のない移動 *migration sans retour*⁽³⁰⁾ だという。人は死んで、出口のないトンネルを孤独に、永遠に移動していくのだと言う。カティー二世は、自分の母と同じように、お腹の子が生まれて息を始めた瞬間、自分は移動を始めるのだろうと考える。

もっとも、移動の途中だろうか、死者が愛する生者の前に現れて語りかけることもある。ジュスタン＝マリーのように、生者に死者の面影（姿の宿り）が見られることもある。もともと *migration* には宗教的含意があって、魂の輪廻を *migration des âmes* というから、*migration des cœurs* は、心がのり移ること、移り住むことなども意味しよう。死者のメッセージを生者が聞きとったとき、死者の心が生者にのり移る。死者の心は受け継がれ、伝えられ、生者に生きる力を与えていくのだ。

風の丘への根おろし

娘とともに故郷に帰ったラジェ二世は、父の死を知り、母が、「若作りの女のように」⁽³¹⁾ 家を変身させたことに違和感を覚え、自分の場所はどこにはないと感じる。精神的に父親似であることを自覚したラジェ二世の前に、父の亡霊が現れ、白人化した生活をするつもりか、早く出発せよと忠告し、息子は風の丘に移り住む。亡夫によく似た孫娘をイルミーヌは溺愛し、孫娘に洗礼を受けさせようとするが、それはラジェ二世にとって「嵐ほどに恐ろしいこと」⁽³²⁾ だった。

『嵐が丘』では、ヘアトンとキャサリン二世は嵐が丘を去って、スラッシュクロスに移る。だがここでは、カティー世が捨てた風の丘に、ラジェ二世がふたたび根おろしする。墓碑から、父とカティー世の関係を知ったラジェ二世は、金のために父を捨てた女の虚栄心に憤りを覚え、復讐のためにグアドループを「火と血に染めた」⁽³³⁾ 父の行為を理解する。と同時に、カティーとラジェの情熱の果実がカティー二世だったのではないかと疑いにとりつかれ、茫然自失する。

作品は、アンチュリアが近親相姦の子であることを強くにおわせながら、「このように美しい子が呪われた存在であるはずがない」⁽³⁴⁾ という決然たる一文で終わる。肌の色で厳しく差別しながら、その実、果てしなく混交するカリブの社

会。そこで、肌の色を越えて、心から愛し合った男女の間に生まれたこどもこそ、たとえそれが禁じられた愛であったとしても、いやだからこそより象徴的に、未来の希望なのだ。

アンチュリアは、年代的には作家の母親の世代に相当する。コンデの母親は複雑な人物である。マリー＝ギャラントの貧しい家に生まれたが、秀でた賢さと努力で、黒人女性教師の草分けとなった。安楽な暮らしを手にするために、年の離れた富裕な黒人男性と結婚。アフリカに全く関心を持たず、クレオール語を話さず、常に完璧なフランス市民であろうとする、誇り高い同化主義者だった。アンチュリアは、白人化を拒む父の教育によって、おそらくコンデの母とは異なった人生を歩むことになるだろう。そして、アンチュリアの心は、次の世代のマリーズ・コンデの肉体に宿るのかも知れない。

6. 結論

荒涼たる寒村にひっそりと暮らした若い女性が、驚くほど鋭い洞察と情熱にみちた、生涯ただ一つの小説を書き上げ、それが後に不朽の名作と称えられることも知らず、黙殺と悪評の中、世を去った。エミリー・ブロンテの人生と表裏一体となった『嵐が丘』は、世界文学史上の不思議の一つといえる。それから百五十年後、『嵐が丘』に強く感じたマリーズ・コンデが、カリブの『嵐が丘』をこの薄命な作家に捧げた。

エミリー・ブロンテが、肌の色の黒い青年の身分違いの恋を描いたことに、マリーズ・コンデは応答する。人種と階級による差別は、奴隷貿易によって形成されたカリブ海地域社会の根幹に横たわる重大な問題であるからだ。コンデは、『嵐が丘』の時代から一世紀を下った、フランス奴隷制廃止から半世紀を経た時代に焦点を当てて、『嵐が丘』の主題をグアドループ社会で展開させ、さらに一世紀を下った現代の読者に差し出してみせる。グアドループが、今も肌の色で細かく位階づけられた社会である以上、『移り住む心』で描かれた悲恋は、過去のエピソードではないだろう。イングランドでヒースクリフが一代で乗り越えた身分の問題は、グアドループにおいては、その後二百年たっても解決されていない。

一方、コンデは、時代の制約の中でエミリーが書きえなかったことを引き継いで語ろうとする。『嵐が丘』の人物設定の不自然さ、謎に対する解決が図られ、

その結果、性についても、当時の女性作家には許されなかった率直さと大胆さをもって、近親相姦の問題にまで踏み込んで描かれる。また、個人的な恋愛や復讐が政治的社会的背景の中で描かれ、その結果、特異な個性として語られるヒースクリフの「悪魔的性格」が、ラジエでは、社会的に造形されたものでもあることが納得されるのだ。

そして、カリブの『嵐が丘』には、新しく「移動」のテーマが加わる。奴隷貿易による強制的移動によって形成されたカリブ海地域では、人は、今在る場からの脱出、移動を試み続けてきた。身体的に脱出できない者は、心で移動する。心は、現世のすべての障害を飛び越えて夢を見、愛する者に向かって動く。死者となっても、その心は生者の心にのり移り、輪廻する。エミリー・ブロンテの心も、時を隔てて、グアドループのマリーズ・コンデに受け継がれたといえるだろう。そして、カリブ社会の基底をなすアフリカ的なものへと根をおろしつつ、人々が限りなく混交しつづけることに、未来の希望が託されているのだ。

註

- (1) Condé, Maryse, *La Migration des Cœurs*, Paris: Robert Laffont, 1995.
- (2) Césaire, Aimé, *Une Tempête*, Paris: Le Seuil, 1969.
- (3) 『嵐が丘』と『移り住む心』の比較については、風呂本惇子、『『嵐が丘』の書き換えに見るカリブ作家マリーズ・コンデの姿勢』、『人間文化研究科年報』16号、奈良女子大学大学院人間文化研究科、2001の先行研究がある。
- (4) Condé, Maryse, *Heremakhonon*, Paris: Segher, 1976.
- (5) Condé, Maryse, *Ségou*, Paris: Robert Laffont, 1984, 1985.
- (6) Condé, Maryse, *Moi, Tituba, Sorcière noire de Salem*, Paris: Mercure de France, 1986.
邦訳マリーズ・コンデ、『私はティチューバーセイラムの黒人魔女』、風呂本惇子・西井のぶ子訳、新水社、1998。
- (7) Condé, Maryse, *La Vie scélérate*, Paris: Seghers, 1987.
邦訳マリーズ・コンデ、『生命の樹—あるカリブの家系の物語』、管啓次郎訳、平凡社、1998。

- (8) 日本語に訳されているものとしては、上記作品の他に、マリーズ・コンデ講演集『越境するクレオール』、三浦信孝編訳、岩波書店、2001。
マリーズ・コンデ自伝『心は泣いたり笑ったり—マリーズ・コンデの少女時代』、くぼたのぞみ訳、青土社、2002 がある。
- (9) Brontë, Emily, *Wuthering Heights*, London: Penguin Books, 1995 [1847], p.36.
邦訳エミリー・ブロンテ、『嵐が丘』、河島弘美訳、岩波文庫、2004、上巻 73 頁。
- (10) 同上書、上巻 13 頁。
- (11) Condé, Maryse, *La Migration des Cœurs*, Paris: Robert Laffont, 1995, p.93.
- (12) Ibid., p.48.
- (13) Ibid., p.48.
- (14) Ibid., p.48.
- (15) エミリー・ブロンテ、『嵐が丘』、河島弘美訳、岩波文庫、2004、下巻 227 頁。
- (16) 同上書、下巻 112 頁。
- (17) Condé, Maryse, *La Migration des Cœurs*, Paris: Robert Laffont, 1995, p.241.
- (18) Brontë, Emily, *Wuthering Heights*, London: Penguin Books, 1995 [1847], Introduction, p19.
- (19) Condé, Maryse, *La Migration des Cœurs*, Paris: Robert Laffont, 1995, p.95.
- (20) Ibid., p.95.
- (21) Ibid., p.82.
- (22) エミリー・ブロンテ、『嵐が丘』、河島弘美訳、岩波文庫、2004、下巻 107 頁。
- (23) 西成彦、「エレン・ディーンの亡霊」、『思想』897 号、岩波書店、1999。
- (24) Condé, Maryse, *La Migration des Cœurs*, Paris: Robert Laffont, 1995, p.150.
- (25) Ibid., p.199.
- (26) Ibid., p.260.
- (27) Ibid., p.177.
- (28) Ibid., p.261.

(29) Ibid., p.271.

(30) Ibid., p.95.

(31) Ibid., p.329.

(32) Ibid., p.332.

(33) Ibid., p.336.

(34) Ibid., p.337.